

「協働による景観まちづくり」

金沢工業大学教授 環境・建築学部建築系
建築都市デザイン学科担当 谷 明彦



金沢方式無電柱化の住民参加型ワークショップにアドバイザーとして参加してきましたので、その内容も交え、今、金沢市が取り組んでいる景観のまちづくりについて講演します。

12年前に金沢へ来た当時は、民間会社で都市関係の実務を行っていましたが、現在は、その実務を中心に蓄えてきた経験や知識をできるだけ地域に役立てることを主眼に、大学で研究活動を行っています。研究室の学生には、まちに出て、いろんなプロジェクトに参画（無電柱化のワークショップも積極的に参加）し、フィールドワークで学ぶよう教示しています。

金沢工業大学について少し触れますと、工科系複合大学として、学生は7,000人います。日本一面倒見のいい大学、教育改革に熱心、ロボコンやソーラーカーレースで全国的に名が知れていることなどがありますが、石川県内では建築系大学が当大学しかないこともあり、地域でも人気があります。私自身は民間会社で働いていた時、自治体のマスタープランや景観計画の作成の手伝いをしてきました。大学へ来てからは、金沢の江戸時代のまちなみを再現したり、加賀平野の土地利用について昭和35年から10年毎の変化を見る基礎研究を行いました。実際のプロジェクトを行ってほしいとの要請から、小学校と連携し通学路の安全確保のためのマップ作りや改善策を練ったり、北前船のまちを伝統的建造物群保存地区に選定する仕事や選定後のまちづくりの進め方を行ってきました。住民と一緒に多くの活動を行ってきましたが、ハード整備のために同時に複数箇所でワークショップを行う自体、初めての経験でしたので、大変興味を持ちました。

金沢は歴史的資源が豊かなまちで、焼失を免れた石川門や三十間長屋に続き河北門などの復元整備が進められている金沢城やひがし茶屋街、長町武家屋敷、兼六園など、全国的に知られている資源がたくさんあります。一方で、歴史だけでは限界があるので、新しいものにも取り組んでいます。全国的にも発信力のある金沢21世紀美術館、伝統に配慮しながら新しいものを導入している金沢駅のもてなしドームと鼓門、近代建築の銀行を曳き家して再開発の一部に活用した近江町市場、北陸では最大級の金沢駅前の商業複合ビルの整備をはじめ、歴史都市であり観光都市でもあるという金沢の大きな2本柱があるなか、ユネスコの創造都市登録を受け、さらに、城下町の遺構や文化的景観が残っていることを切り口にした世界遺産登録にもチャレンジしています。



平成26年には北陸新幹線が金沢まで開業し、観光客やビジネス客が増えると思いますが、その一方で、大都市との時間短縮から、宿泊する人が少なくなったり、支店を置く企業が規模を縮小したり、期待と不安の中、いろいろなことが起きると想定されます。

このような状況のもと、金沢市が手立てする一つの重点として、景観という側面を強く打ち出していくことが大切だと思っています。歩けるまちづくりは、景観や交通と深く関わり合いがあり、景観を切り口に様々な施策が繋がり、その結果世界遺産登録にも結びつくものとして、景観を重要視しています。主計町の茶屋街や長町武家屋敷界隈、無電柱化された金沢駅前や鞍月用水沿いのみちなど、景観に配慮したまちなみが重層的に存在していますし、藩政期時代、明治大正の近代、そして現代のまちなみが至るところで発見できるところが、金沢の大きな特徴です。



これらのものをどのように捉え、景観整備していくべきかが、金沢の景観まちづくりとなります。市内をゾーニングし、各ゾーンで地域の特徴ある景観を守り伸ばしていく「こまちなみ保存条例」があります。この条例は、藩政期の風情をそこに残しているが、伝統的なまちなみにするにはボリュームがないので、そのレベルで綺麗に整備しましょうという考え方です。また、用水を保全する条例や夜間景観を美しくする条例など、いろいろな切り口で、それぞれ景観を少しずつ良くしていこうという努力を、今始めているところです。

ここで大切なことは、行政主導で行動しないこと、なるべく費用をかけずに効果を上げるには市民の理解が不可欠であること、そしてコンサルタントや設計者、専門家が良いものを選択していくことであり、この仕組みが「協働による景観まちづくり」と言うことです。

金沢のまちなかを歩くと、武家屋敷を模して造った新しい住宅や町家風の家が建ち並び、所々にブロック塀はあるけど懐かしい雰囲気が出された景色があります。しかし、電柱や電線が混在しすっきりしていないことで、金沢らしい景観が阻害されています。無電柱化を進めることで良い効果や悪い点も幾つかありますが、それらをひとつひとつ解決していくことが大切です。

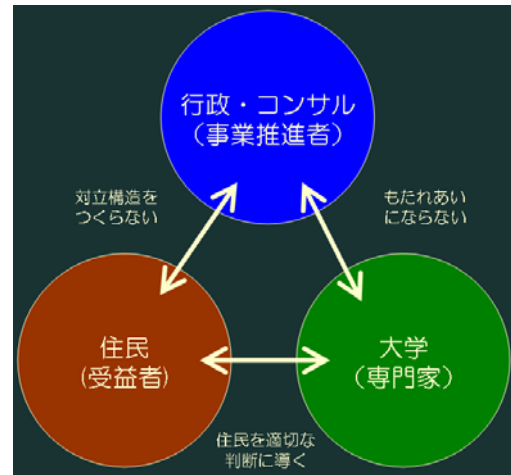


今進めている金沢方式の無電柱化は、住民参加による協働のまちづくりというコンセプトのもと、壁配線や裏配線、ソフト地中化等を組み合わせながら、地域にあったパッケージにまとめていくもので、今は無電柱化に重点を置いています。全体として景観整備していくことで、活力のあるまちづくりに繋げていこうという主旨です。軒下配線であれば持ち主の理解と合意が必要となりますので、多くの方がワークショップへ参加していただく

よう働きかけています。モデル6地区で実施しているワークショップでは、机上で大きな図面を拡げ整備手法について説明し、現地では地上機器の模型を置きながら、率直な意見や感想を聞き取りしています。ニュースターのような瓦版を作成し、参加できなかった方への伝達も行っていますし、最終的には、住民全員に対しアンケート調査やヒアリングを行い、住民の意見を十分に反映した内容で決めていきたいと思っています。



何故、協働のまちづくりが必要かと言いますと、これまでは行政が事業の進め方を決めてから住民に提案し、住民は納得するか反対するかの二分法になり、住民側の十分な理解が得られていないことや反対による事業遅延や中止などの弊害が生じていたからです。現在取り組んでいる金沢方式のワークショップでは、行政・コンサルタント・住民・大学関係者が参画し、対立構造を作らないよう、コンサルタントがファシリテーター（中立の立場で議論を調整する役）を務め、行政は黒子役に徹し、大学関係者は行政と同じスタンスをとらずに住民へ適切な助言を行い、上手に三角形を作ること、納得できる結論へ導くことができます。住民もワークショップに慣れていないため、自己の利害関係について訴えてきますが、回数を重ねみんなで話し合っているうちに、空き地やお寺の境内に地上機器を置く案や完全地中化しなくてもいい案など、いろいろな改善策を提案するようになってきました。そういう効果が徐々に現れてくるのが我々の目的ですが、一方で、専門的知識が少ない住民に十分に理解し学んでから意思決定してほしいとの思いも強く、住民参画に意欲のない方を如何にして引き込むかということが懸案であると思っています。



オレゴン州のポートランドは、ダウンタウンがコンパクトにまとまり美しいまちです。アメリカでも早い時期にLRTを導入し有名になった都市ですが、同じ煉瓦を歩道に使用していることでも一目置かれています。まちの店はショーウィンドウ化し賑わいを誘発したり、道路に面した住宅地では前庭を作り都市住環境の改善を促進していますが、ひとつひとつにお金をかけず、ごく普通にある安価な材料を組み合わせ使っていることが素晴らしい点であり、市全体を通じ、きっちりと統一したポリシーが見られます。

美しい景観とは、そのまちの個性や健康さが現れたものです。ワークショップでは、街灯や敷石は脇役であって、統一のとれた景観であればそれでよしであり、まちなみが主役、住民のみなさんが主役であることを説明してきました。金沢は黒瓦でも有名なまちですが、俯瞰すると白いコンクリート建物が目立ってきましたので、もう一度、風情あるまちとして統一する努力が必要なのかなとも感じています。

平成 21 年 11 月 12 日（木） ホテル日航金沢にて

LRT : Light Rail Transit (ライト・レール・トランジット)

低床式車両 (LRV) の活用や軌道・電停の改良による乗降の容易性、定時性、速達性、快適性などの面で優れた特徴を有する次世代型路面電車システム